

## 地球の木二十五周年に寄せて 清水俊弘氏講演記録

「地球の木が地域集団の利点を生かし、かつ、地に足がついた活動を広げていくにはどうしたらよいか。それには理解を共有する時間と労働を厭わずに多様で多彩な力で結集すること」——地球の木二十五周年記念事業講演「地球の木二十五周年に寄せて」（五月一九日・横浜開港記念会館）で講師の

清水俊弘さん（日本国際ボランティア協会・JVC、地球の木顧問）が示唆したメッセージである。JVCスタッフとして国内外でボランティア支援活動に長年携わってきた清水さん。講演では地球の木創立当時のエピソードを交えながら、当時から今日までの世界情勢と連動するNGOの役割変化、また、地球の木が果たす役割、さらに自身が山梨県で続けているオルタナティブな暮らしの実例をあげてボランティア活動のあり方とさらなる実践を述べた。



まず、地球の木の設立当時のエピソードとしては、1991年の国内外の出来事として、1月：湾岸戦争、7月：グローバル市民基金地球の木設立総会、11月：支援地現地調査ラオス初参加、12月：ソビエト連邦消滅の事例を挙げ、「私自身、地球の木の開設に関わらせて頂き、設立当初から、付かず

離れず、これまでの間、地球の木の皆さんと色々ご一緒させて頂いたご縁もあります」とし、当時担当していたカンボジア難民支援活動の一環として地球の木の事務局スタッフらとともにした支援会員確保の体験を述べた。

国際情勢化とNGO活動の関連性については、「市民として、何が出来るかという事を考えるムードも広がった時でもあった。そして消費と生産の関係性、それが、まさに生協運動であり、それが、地球の木の根源で、この時代の地球の木が生協活動の中から始まったのは、この時代の必然だったような印象を受けました」と述べた。

続いて地球の木が今後とも維持するには、3つの活動があると示唆した。その三つとは、「生活活動」、「草の根活動」、「社会活動」。そこを通して見えてきた様々な社会問題や政策提言の活動があり、それを支持する関心層を広げていくための啓発活動があるとし、これは絶対に欠かせない『三種の神器』だと強調した。また、「私たちはプロでなく、生活者であるという事を軸にすると、私たち自身が学ぶ事が求められる当事者であるという意識を持つ事が大事。そのためには、現場にのみ、現象だけに目を奪われないで、問題行動にアプローチする姿勢を持ち続けていく事。これは今後も守っていききたい」と力説した。

山梨で実践しているオルタナティブの生活については、『僕も一本の地球の木だ』という立場で言うと、具体的な暮らしの形にして行きたい。『視覚化』と言っているのでしょ。うか。目に見える形にしていきたい」とし、2004年に開設した山梨県韮崎市六山町でカフェの店を核に展開している各種の活動（地元農家との農作物提携、さくらまつり、気仙沼応援のサンマ祭、小学生対象の英会話教室など）の事例を挙げて、その意義と成果を述べた。

# 地球の木二十五周年に寄せて

## 清水俊弘氏講演記録

そして講演の核心でもある地球の木の活動の心がまえについては、前述した三つの活動を踏まえ、「集団が、活動していくために、もっと、もっと、地域にあるさまざまな力を結集していく事。それには物事を可能な限り単純化しないこと。また、無視しない選択肢が大事ではないか」と述べた。具体的な指針の一つとして、「地球の木は、神奈川と言う地域性のある集団だと思えますので、そこをうまく『地縁』と言う地域集団としての利点を生かして貰ったらいいかと思います。一人一人が一本の地球の木として大事だし、それを二十五年間培ってきた。そういう意味で神奈川に地球の木が一杯になって、地球の木を増やしていってほしいんじゃないかと思えます」と提案した。

(記録：二十五周年記念事業実行委員 野崎俊一)

